

教えて! 市立病院

〈第 135 回〉

慢性肝臓病について

■問合せ／市立病院総務課企画財務担当 ☎ 22-2450

慢性肝臓病は、一般的に慢性肝炎から肝硬変へと進行し、さらに肝がんを発症することがあります。肝硬変の原因として、かつては C 型肝炎ウイルス感染による C 型肝炎が最多でしたが、内服薬でほぼ治る病気となり、C 型肝炎の患者さんは減少しています。また B 型肝炎は C 型肝炎と違ってウイルスを体内から完全に排除することは困難とされていますが、内服薬によりウイルスの増殖を抑え、肝硬変や肝がんへの進行を抑制することができます。当院では血液検査にて肝炎ウイルス検査を行った場合、C 型肝炎ウイルス・B 型肝炎ウイルスに感染しているかどうか、検査結果を文書で説明しています。治療できる肝炎を見逃さないことが大切です。



【今月のドクター】

消化器内科長

すずき あきひこ
鈴木 明彦 医師

肝硬変の原因として最近多くなってきたのは脂肪肝やアルコールです。脂肪肝はウイルス性肝炎のような特効薬はありませんが、肥満や糖尿病を伴うことが多く、体重減量や糖尿病の治療で ALT 値*が低下する人が多いです。日本肝臓学会では ALT 値が 30 を超えたらかかりつけ医を受診し原因検索を行い、必要に応じて消化器内科を受診するよう提唱(奈良宣言 2023)しており、ALT 値が 30 を超えると肝硬変や肝がんに進みやすいことが分かっています。アルコール性肝硬変では肝不全や食道静脈瘤破裂により、40～50 代で命を落とす人がいます。言うまでもありませんが、治療は断酒が大前提となります。

肝臓は沈黙の臓器と言われ、病気が進行していても症状がないことが珍しくありません。気になる人はかかりつけ医や消化器内科を受診し、病気の早期発見・早期治療につなげましょう。

※ ALT 値：肝臓に多く含まれる酵素。血液検査でその値を測定することで、肝臓の状態を把握することができます。